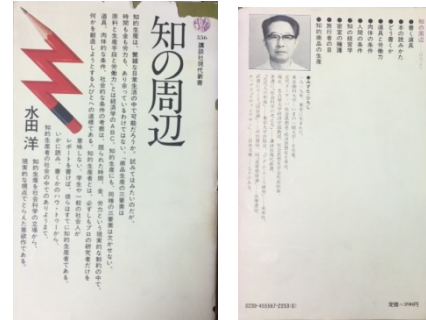


ある精神の軌跡(続)

写真は水田洋先生の『知の周辺』講談社現代新書、1979年。ちょうど名古屋市立女子短大に就職した年であり、「知的生産」を志すうえで愛読してきた。当時の水田先生の写真も掲載されている。ここでは『知の周辺』ではなく、先にレポートした水田先生の自伝『ある精神の軌跡』から興味深かったことを書いていきたい。



「ぼくのこの世における記憶は、青山南6丁目108番地(現在の南青山4丁目)で出あった関東大震災にはじまる。」先生と車中で話したときも、東京青山の話がよく出てきた。現在の南青山4丁目は地図でみると、よく泊まったことがある公立学校共催「フロラシオン青山」あたりだ。洒落た街並みであり、坂道が多く、朝早くぶらりと散歩した。

水田先生の父上は、『言泉』の編集に参加し、国語や漢文を教えられていた。「散歩にでると古本屋をまわって、なにかを買ってきたので、蔵書の量は木造家屋を傾けるほどになり、それは母のなげきのたねであった。」水田先生の大きな書庫を見せてもらったが、数多くの蔵書が並んでいた。名大中央図書館にも、およそ7000冊の「水田文庫」がある。先生がイギリスなどで収集された原典など、貴重書も大切に保管されている。「収集癖は遺伝したのかもしれない」と書かれている。

水田先生は一橋新聞編集の一員、編集長として、数多くの人に原稿を依頼し、自ら筆をとった。文芸部の委員長として『一橋文芸』の発行にもかかわった。「ぼくは、周囲から、あるときは作家になるとおもわれ、あるときはジャーナリストになるとおもわれていたようであるが」、その後、「研究者としての道を考えはじめ」、「職業としての学問」に専念することになる。

こうした先生の歩みとも関係するのであろうか。「ときどき、ぼくは著作について多産であるといわれる。内田義彦、小林昇などの先輩にくらべてけっしてそうだとはおもわれないが、もしそういうことがいえるとするれば、その原因のひとつは、文章を書くこと自体について、苦勞を感じないということであろう。」

戦雲のかけが濃くなるなかで、神田駿河台にあった東亜研究所に就職する。所員のなかに、先月レポートしたように、信州大時代にお世話になった渡辺義晴先生の名前もあり驚いた。「ぼくの仕事は、アメリカ戦時経済を、とくに鉱物資源の面からみていくことであった。」そして、安芸丸で南の海へ。そのときもっていた本は、ホップスの『リヴァイアサン』、ヘミングウェイの『武器よさらば』、茂吉の『暁紅』であった。じつは昨年、目の手術で入院したとき、なにはともあれ鞆に入れたのが先生の『アダムスミス』であった。先生はジャカルタについた日から、古本屋で多くの本を手に入れ、読むべき本には、まったく不自由がなかったという。

(2016年10月2日)